発行 全国商工会議所青年部連合会
東京都千代田区丸の内3－2－2
日本商工会議所中小企業振興部内
☎03-283-7847
編集 広報委員会

翔生（しょうせい）

平成元年（1989年）
11日1日号
通巻 第7号
（年2回 3月・10月発行）

集え！11月17日、自由の土佐へ

よさこい高知 あったか高知

人・自由の海 '89 KOCHI

第9回全国大会、高知で開催

前橋から高岡、大分、水戸、福井、福島、沖縄、そして昨年の山口に続き、維新の地・高知での商工会議所青年部全国大会開催は、第九回を数えます。今大会は、第十回会員総会で採択された「綱領」「指針」を初めて掲げる平成初の大会であり、また全国九カ所で行われたブロック別運営研究会の成果を結集して開く大会となります。昨年度の商青連創立五周年記念誌「明日への挑戦」に示された、今後の青年部のあり方に基づいて、さらによりよい大会を創りあげていきたいと考えています。全国の同志の皆さん、来る十一月十七日は高知大会に参集し、大いに研鑽・交流し、親睦を深めましょう。

「よさこい高知！あったか高知！」写真は坂本龍馬像と播磨屋橋

次代への先導者たる、我々商工会議所青年部会員が一堂に集う平成元年度の全国大会は、四国の南側で、弓なりに太平洋を望む土佐の地・高知市で高知県商工会議所青年部連合会の主管により、十一月十六日、十七日の二日間にわたって開催されます。

東西に長い海岸線の両端に、黒潮洗う奇観・室戸岬と足摺岬が腕を伸ばし、さながら太平洋を抱え込むようにも見える土佐湾には、今もよさこい節に歌う通り、「おらんくの池にゃ、潮吹くさかなが泳ぎよる」し、四国カルストや龍河洞の豪快な自然と、「龍馬にも、ふと逢えそうな土佐のまち」というくらいに、開放的なイゴッソウとハチキンの人情で青年部諸兄をお迎えします。

さて、高知県連では「拡げよう友情の輪　創ろう新時代の日本」をスローガンに集う青年経済人の大会にふさわしい内容にと、実行委員会を組織し、アンケートに最大限応える運営を目指して各部会ごとに準備を進めています。

アンケートの大意は、セレモニーは厳粛で簡素に、会員の相互交流の機会を可能な限り増やし、ブロック別運営研究会の統合的な運営を望む声が多く、参加した実感のある大会を、ということに要約されるようです。

そこで今大会では、記念事業として十一月十六日から十九日の間、高知市中心商店街に、各地青年部のお世話で出店していただき、「日本百景」として全国商工祭を開き、事業に活かせる情報交流の場となるよう企画しています。新たな実質交流の機会として大いにご参加をお願いします。

また沖縄大会から始まった業種別交流会を拡大し、十六日の夕刻から「交流分科会」として鰹のたたきをはじめ土佐のグルメを楽しみながら高知県各界から座長を招いて、七つのテーマで交流を深めていただき、本音の交歓から、明日への挑戦を掴んでいただく趣向です。

なお、十六日の午後には第十一回会員総会と、太平洋を一望する、土佐CCでのゴルフコンペが開催されますので、十六日からご来高下されば、充実した大会参加となります。

地酒を汲みかわし、気心が知れたところで、十七日は午前九時三十分から厳粛に式典の開催です。

商青連旗の入場、「伸びゆく大地」斉唱で心を一つにし、大会初の「綱領」「指針」の唱和で青年部の姿を確認し合います。式典の中ではセレモニーの他、特に土佐藩の岩崎弥太郎を創始者とする三菱電機㈱の相談役で地元出身の進藤貞和氏に、「若者に与う」と題して特別講話をいただきます。さっくばらんなお話には、青年経済人にとって有為なヒントがたくさんあるでしょう。

午後は、鈴木健二氏を迎え、「いま、日本人に求められているもの」と題する記念講演です。NHK在職中の講演とはひとあじ違ったゼミナールとなることでしょう。

続いてお楽しみタイムでは、土佐犬、尾長鶏　はし挙の他、土佐の伝承に触れ、土佐自市場で特産物を掘出して、利き酒を愉しんでいただく間に大懇親会の時間がやってきます。自由闊達な土佐の気風、「お客」（土佐弁でパーティの意）を堪能して下さい。

この他、観光、ゴルフとエキスカーションも用意しておりますし、高知市では「大龍馬展」が十九日まで開催され、秘蔵の品も公開されます。十九日には全国でも珍しい「日曜市」が高知城から追手筋沿道一キロにわたってテントを連ね、商いと買い物の愉しさを展開しています。

日程の許される範囲で十分に〝あったか高知〟に浸っていただき、もう一度訪れたい高知と感じて下さい。土佐には宝もの（物・者・モノ）がたくさんあります。宝探しのガイドブック「土佐の宝物」を記念にお持ち帰りいただいて、またのお越しをお待ちしたいと思います。

「よさこい高知」。十一月の高知は例年好天続きの過ごしやすい季節です。澄んだ川の流れ、紅づく山々、青い海、青い空、土佐をあげて全国の皆様をお迎えします。

商青連役員と石川日商会頭との懇談会の内容を四～五面に掲載

第9回全国大会スケジュール

●11月16日（木）
- 15:20～15:50　会員総会受付
- 16:00～17:00　第11回会員総会（高知新阪急ホテル・3階花の間）
- 17:00～17:30　（休憩・移動）
- 17:30～20:00　交流分科会（高知新阪急ホテルほか）
- 16:00～20:30　（安芸分科会　ホテルタマイ）

●11月17日（金）（於：高知ぢばさんセンター）
- 9:30～12:00　第9回全国大会（第1部・式典）
- 12:00～13:00　（休憩・昼食）
- 13:00～15:00　第9回全国大会（第2部・記念講演）
- 15:00～16:30　お楽しみタイム
- 16:30～18:30　懇親会

自由の海・土佐からのメッセージ

高知大会
大会長　和田　均

「拡げよう友情の輪　創ろう新時代の日本」のスローガンのもと、自由の海・土佐の高知に、全国九ブロックから、二十一世紀の地域を担う青年経済人にご参集いただいて、第九回商工会議所青年部全国大会を開催できますことは、高知県商工会議所青年部連合会にとって、無上の喜びです。

昭和から平成へと時代が変わり、様々な変化の波は〝うねり〟となって、今まさに全国各地域に押し寄せているのだと感じます。

青年経済人として、坂本龍馬、中岡慎太郎をはじめ幕末に維新の礎となった多くの若者を出した土佐、明治には「自由は土佐の山間より出ず」と言わしめた、板垣退助を生んだ自由民権運動発祥の地・土佐、戦後日本の自由社会を築いた吉田茂の土佐で、新時代の日本の扉を押し開く感激を共に感じあえる大会にしたいと、準備を進めております。

「自由の海の渚には、世界の波が打ち寄せる。歴史の舵はいつの世も、熱あるものが取ってきた」

高らかに、商工会議所青年部の歌を歌いながら、明日に我らは船出しようではありませんか。

国民休暇県を宣言した、高知の県連一同、「もてなしの心」で土佐の自由と自然を満喫していただき、素晴らしい大会にすべく、大勢の青年部会員諸兄のご参加を、心よりお待ちしております。

日本列島青年部

現在、商工会議所は全国に四百九十四あるが、このうち三百二十の商工会議所に青年部が設置されている。いずれの青年部も商工会議所活動の活性化並びに地域経済社会の発展のために、地域に根差した幅広い活動を展開している。今回は、これらのうち遠軽（北海道）、山形（山形県）、黒部（富山県）、大宮（埼玉県）、鈴鹿（三重県）、彦根（滋賀県）、下関（山口県）、愛媛県連の七青年部、一県連の事業について、紹介する。

北海道遠軽青年部

遠軽・エンジン全開!!

昭和六十二年十一月三十日、街づくりと明日の人材づくりを目指して、遠軽商工会議所青年部が結成された。特に、商店街再開発の気運が盛り上がっている時期でもあり、周囲の期待を集めての誕生だった。

しかし、各団体の寄せ集め的メンバーで、事業計画の解釈にも相違があり、含みを持たせたことが、曖昧という形で残ってしまった。この結果、外からの期待とは別に、一部会員の不満を黙殺するまま発車した。良くいえば幅があり、悪くいえば曖昧な事業計画のために、会員各々が、自分の所属団体のイベント支援の要請を次々に持ち込んできた。

以来、町内各種イベントの協力・共催、さらには、主催者になる等、特定の会員のみが活動するようになった。一周年を迎える頃になると、多くの反省の上に立って、活動範囲を厳選しよう、重要課題に力を傾注しようということになった。

今年に入ってからは、街づくりのための町民フォーラムを主催し、多数の町民の声をまとめた報告書を作り、関係機関・団体に配布する等、会員の納得できる展開になってきた。

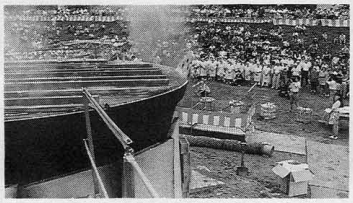
その後、当町が念願であったコミュニティ・マート構想モデル事業の地域指定を受けた。このマート構想実現のために、昨年設立された遠軽商店街（協）とも連携を密にして、街づくりに協力をする所存である。

また、遠軽町には、自衛隊・第二十五普通科連隊が駐屯している。部隊の増強と周辺環境の整備を訴えるべく、運動を続けている。当町には、自衛隊関係七団体がそれぞれの目的を持って活動している。しかし、活動の停滞している団体もあり、行政・関係六団体間の一部協力体制の不備等も指摘されているのが現況である。

青年部では、各団体を抱括した全町的な組織を作り、先の運動を推し進めるべく、他の青年団体に呼びかけ、鋭意準備をしているところである。さらに今年は、遠軽商工会議所創立四十周年の年である。会員の中には六人の議員（うち常議員三人）もおり、積極的な協力体制をとっている。

これら一連の事業を通してますます会員の結束を高め、来年度の北海道ブロック商工会議所青年部運営研究会を迎えたいと考えている。

▲街づくり町民フォーラム（遠軽）


▲芋煮会の大鍋（山形）

山形県山形青年部

日本一の芋煮会

一体、食べてみておいしいのかどうか誰も分からない。直径五メートルの大鍋というと、まるでプールのようなものだから、「くれぐれも人間のダシを取らないように」と、山形市長に念を押された。

本番一週間前になってやっと大鍋は出来上がり、試験とアク抜きを兼ねて、よもぎを煮る。だが、沸点に達しない。つまり、煮たたないのだ。当初は鍋を支える炉と十トンの内容物に鍋が耐えられるか、もっぱら力学的な疑問の方が大きかった。

しかしやってみると、火力が肝心だったと分かる。眼の前が暗くなる。「俺はやっぱりバカだった」と分かっても、本番はあと数日。残ってくれている会員の顔も暗い。仕事はもちろん寝る時間も削って、成功のために熱中している連中だ。もう、逃げ道はない。そこへ工業技術センター所長が現われて、「俺は人の失敗を見るのが大好きなんだ」と、高笑いを浴びせかける。この人はいい人なんだが、口が悪いらしい。

朝四時、パトカーの先導で、会員がそれぞれ枝道にはりつき、トレーラー車で出来上がった大鍋を運搬した誇らしい気持ちと、その日の日暮れになっても鍋が煮立たない暗澹たる気持ちが一日のうちで交差した。今となれば本番当日よりも、この日の方がずっと重かったように思う。

開催前日、大鍋は工業試験場の庭からヘリコプターで、川の上をただより、会場となる馬見ヶ崎川原に移される。大勢の人の見守る中、小雨にもかかわらず、「空飛ぶ鍋」が現われると、自然に拍手が起きる。見物人のカサを風圧で飛ばしながら、UFOにも似た鍋が無事到着すると、日常の中では忘れてしまっていた熱いものがこみあげてくる。握手を求めた会員の中の熱中派が皆泣いている。

当日の心配のひとつは天候。前日も雨、その後も雨降り続きの奇跡のような雨の降らない日だった。まだ一度も具を入れて煮たことがなかった大鍋は、人の心配をよそに、普通の鍋よりもおいしく煮え、「鍋はやっぱり鍋なんだよ」と語りかける。

具の量十トン・二万食が、取り出せない底の部分を残してすべてなくなり、それでも食べられなかった人が大部分というほどの人出だった。

山形青年部による芋煮会は、山形市民にとけ込んだ楽しい秋の風物誌である。そして、山形には牛肉をはじめ、里芋、コンニャク、お酒など、おいしい素材が満ち溢れている。我々のこの次の夢は、青年部の全国大会を是非山形で開催させていただき、この大鍋で、おいしい芋煮を皆様にご賞味していただくことである。山形青年部は、皆様が全国大会で来られる日を熱烈に待ち望んでおります。

成功へのてんまつ

埼玉県大宮青年部

盆栽大会に大役果たす

昭和六十一年四月十七日に設立した大宮商工会議所青年部も、早いもので来年は創立五周年を迎える。本年度は役員を一新し、十三人で理事会を構成。委員会は五つに増やし、強力なメンバーの参加により切磋琢磨しつつ自己研鑽を行い、地域社会の先導者として、資質の向上を図るべく努力している。

大宮市は東北・上越新幹線の起点であり、東日本の玄関口である。また、この四月より成田空港直行バスが毎日十六便運行され、世界への旅出ちの一歩が大宮から始まるようになった。

先に行われた「世界盆栽大会」には三十一カ国七百余人の参加者があった。この時には、青年部が主会場の盆栽村の歓迎接待責任者に大宮市より指名され、無事大役を果たし、訪れた外国の人々に好感を与えたと自負している。このことを今年の夏に確認することができた。

商用でヨーロッパに出掛けた折、先の盆栽大会で知り合いになったイタリア人とミラノで再会したところ、滞在中の日本のもてなしに対して大変感激し、とても喜んでいた。人の出会いの素晴らしさを知り、心からふれあいをすることにより、人と人、国と国が仲良くなり、平和な世界が築けるものと確信した。

このようなことも青年部活動があったからこそだと思うので、本年度は外部に向けていろいろな事業を行っている。七月には街づくり委員会が「大宮の歴史と文化を語る会」を市民の多数参加を得て開催した。結果は上々で「次回はいつですか、私たちの回りの人々にも聞かせたい」と、ありがたい言葉をいただき、この文化活動をより大きく楽しいものにしていくべく研究している。紙面の都合で報告できないが、他の四委員会もそれぞれに積極的な活動をしている。

平成二年度の関東ブロック運営研究会は大宮での開催が決定した。来年度は当青年部の創立五周年に当たり、また大宮市政五十周年でもある。そして、関東ブロックは第十回と、記念すべき大会となる。

我々青年部は明確な目標、目的を持ち、勇気と情熱を持って積極的に行動することこそ真の青年部の使命であると信じてやまない。明日の日本をひらくため、全力を尽くして行動していくことにしている。

富山県黒部青年部会

熱く燃えた九千人 街づくりコンサート

去る八月十六日、富山県黒部市にある宮野山野外ステージ「ミューズ」で、米米クラブ、杏子バンド、NAOを迎えての街づくりコンサート〝HOT FIEALD'89〟が開催され、県内外より九千人以上の若者を動員することが出来た。

この〝HOT FIELDコンサート〟は、数年前、黒部に住む若者が「元気のある黒部」を目指し、市制三十周年記念イベントとして街の特色づくり、顔づくりとなる事業ということで、市内にある青年と名のつく六つの団体（青年部会、青年会議所、連合青年団等）が協力し合う形で、サザンオールスターズを呼んでコンサートを開催したことに始まる。

このコンサートをきっかけとして、六団体で黒部青年団体連絡協議会（KYC）が設立され、〝くろべ〟の街づくりに対して、青年らしい提言や行動を展開していく核となっている。その中で提案された野外ステージが行政の理解もあって、日本海側最大の素晴らしい野外ステージとなって昨年完成し、そのこけら落しとして第一回目の〝HOT FIELD'88〟がスクエアー、カシオペア、日野皓正らのアーティストを迎えて開催され、八千人ほどの動員を見ることが出来、一応、成功を納めることが出来た。

しかし、当初の主旨である街づくりコンサートという意味合いから、「継続してこそ街の顔になる!!」という意見、また、行政や地域の企業からも継続を望む声が強く、今年になって第二回目の〝HOT FIELD'89〟の開催となったわけである。

さて、継続して続けていくとなると、KYC各団体の足並みがなかなかそろわず、かといって単会で行える事業でもなく、青年部会が主体となってKYC各団体より有志を募り、またKYCの枠を超え、市内に住む若者から公募し、七十人で実行委員会を作って準備を始めた。二回目ということで、昨年の実績もあり、準備も順調に進んだが、実行委員会で企画から運営、会場設営、チケットの販売まで行い、メンバーには大変苦労があったと思う。

また、コンサートのPRにからめ、〝くろべ〟の街をPRするキャラバン隊を金沢、新潟方面へ出し、県外から約二千人の人に黒部へ来ていただいたことは、街づくりコンサートとしての〝HOT FIELD〟の一つの成果であろうと確信、〝HOT FIELD〟は、〝くろべ〟の顔として定着しつつある。

「〝くろべ〟の街づくりは、〝HOT FIELD〟から」を合言葉に、これからも継続していきたい。

〝いきいき〟

下関海峡まつりに参加
市制百周年を盛り上げ

山口県下関青年部会

下関商工会議所青年部会は、設立九年目を迎え、下関の「地域活性化」を目指している。

イベント活動としては、五月のゴールデンウィークに全市を挙げて行われた「下関海峡まつり」への参加がある。

今年は市制百周年記念ということもあって、例年より規模・内容とも大きく行われた。当青年部会は、様々な部門に参加したが、中でも子供向けの企画として、一周約四十メートルのコースをつくり、ミニ四駆レース「海峡グランプリ」を行った。子供達の人気は最高で、一人で何回もチャレンジする子もいて、三日間で何と二千人もの参加者があったほどである。

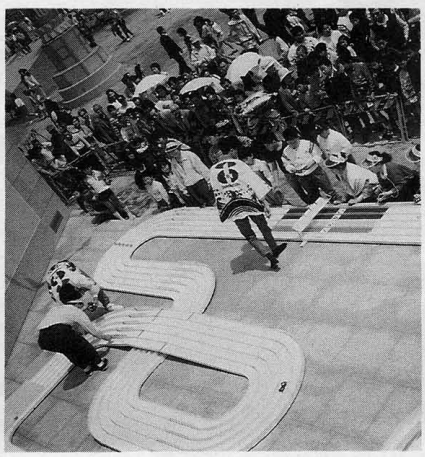
さらに、ファミリー向けの企画として、長さ十メートルの鉄板で、お好み焼をつくったが、値段の安さ、味の良さも相まって、焼く方が追いつかないほどの盛況ぶりだった。

そして極めつけは、今年で四回目を迎えた「ジャンボふく鍋」である。直径三・二メートル、深さ一・二メートルの鍋を使い、味噌仕立てのふくチリを味わっていただくものであるが、今年はついに鍋の容量いっぱいの二万食分の配布に成功し、沢山の来場者に喜んでいただいた。

また、イベントだけでなく、経済活動としては、七月に「中小企業振興シンポジウム」を企画・立案し、下関市の現況と将来についてパネルディスカッションを実施したところ、定員を大幅に上回る参加者があった。市内の経営者の関心の高さが伺われたが、参加者に聞いてみると、今後もこのような企画を続けてほしいという要望が多数聞かれ、メンバーも次回へ向けて意欲を燃やしている。

さらに、大陸に近いという地理的条件から毎年、韓国に商工業視察団を派遣し、今年も九月二十二日から三日間、釜山直割市を訪問し、現地の若手経済人と交流を深めてきた。国際都市・下関を代表する若手経済人として、将来的には合弁事業等の経済活動ができれば、とも思っている。イベント中心から、「商工会議所青年部会」という立場を利用した経済活動への脱皮。これが当青年部会に課せられている課題である。

自分がよくなれば、企業がよくなる。企業がよくなれば、地域がよくなるはずである。今後とも自分を見失うことなく、地域活性化のため、国際化のため、当青年部会は躍進し続ける。



▲海峡グランプリ（下関、下も）

▲長さ10メートルの鉄板でお好焼

〝グッドライダーキャンペーン〟
全国の若者が鈴鹿の夜を満喫

三重県鈴鹿青年部会

七月二十九日、鈴鹿サーキットグランドスタンド特設ステージで開催された八時間耐久レースの前夜祭に、鈴鹿商工会議所青年部会は「出会い・ふれあいグッドライダーキャンペーン」をキャッチフレーズに、イベント参加した。

このキャンペーンは、青年部会が「四時間耐久レースの参加」、「前夜祭のイベント参加」、「全国の青年代表のホームスティの実行」という三つの柱を軸に、鈴鹿に集まる若者へ交通安全の認識を呼びかけようというもので、まさにモータースポーツの街「鈴鹿」にふさわしい企画である。

四時間耐久レースには、「鈴鹿商工会議所青年部withF・J」チームが参加。惜しくも無念の涙を飲む結果となったが、「また来年、四耐で会おう!!」との他の若いライダー達の呼びかけに、青年部会活動への理解を肌で実感した。

また前夜祭でも、参加者にパドック入場券、そして総合優勝者には来年度の八耐チケットと宿泊券がペアで進呈される「レースクィーンと遊ぼうサバイバルゲーム」、「大声コンテスト」、「八十秒耐久コカコーラ早飲み大会」、「顔面洗濯バサミゲーム」など多彩なイベントを主催。若者に笑いと熱気溢れる鈴鹿の夜をプレゼントすることができた。

「グッドライダーキャンペーン」大成功!!

来年の八耐もどうぞ　ご期待!!

井伊の赤備え
彦根鉄砲隊
観光彦根に喝！

滋賀県彦根青年部

井伊家三十五万石の城下町・彦根。国宝彦根城をはじめ、歴史的遺産を数多く残しながらも、今ひとつ街の活性化に拍車がかからないといわれている。他都市にはない、その素晴らしい遺産を守り育てるとともに、新たな視点から、「観光彦根」を売り出そうとあれこれ模索してきた中で、彦根観光開発の起爆材として、彦根商工会議所青年部の同志三十数人で発足したのが、彦根古式銃研究同好会「彦根鉄砲隊」である。

会員らは、発隊を前に、県内はじめ大阪・堺方面まで出かけて古式火縄銃十五丁を私費で購入。鎧兜などの具足は、会議所議員や市、関係各団体からの協力を得て、約四百五十万円で新調した。その砲術は、稲富流とされ、その師を堺より迎えては、銃の構え方や火薬の装填の仕方などを学び、練習を重ねた。その後「井伊の赤備え」の甲冑に身を固め、彦根市の春の恒例行事である市民園遊会で、発隊記念披露の演武を行い、薩政時代をしのばせたのは昭和五十九年四月七日のことである。

現在、発隊六年目を迎えて、市内主要行事（お城まつりなど）への出務はもちろん、TV局番組収録のための出務（トライアスロン大会、鳥人間大会、どこか遠くへ行きたい、極めるⅡなど）も年々増えている。また、彦根と姉妹・友好都市である高松、水戸、横浜、松本、沖縄市などからも、祭りへの出務依頼が相次ぎ、多忙な活動に隊員も積極的にあたっている。

一方、火薬・火縄銃とも危険物としての取り扱いに、種々困難な問題を残しながらも、対外的にもようやくその活動を認められるようになり、今日に至っている。今後は、さらに一層具足などの充実を図りながら、演武にも磨きをかけ、観光彦根に喝!を入れ、街の活性化に一役買いたいと願っている。

▶鉄砲隊の行列（彦根）

海外研修など実施
「愛媛県連をよろしく」

愛媛県青年部連合会

一昨年、愛媛県下八商工会議所青年部の会長会議で、県連組織をつくって、県下の統一を図ろうと決定され、愛媛県商工会議所青年部連合会が昭和六十三年四月一日からスタートした。

初年度の昨年は、従来その担当の単会が主催していた愛媛地区会員大会を愛媛県連の主催とし、初代日野会長の所属する新居浜青年部の主管で開催された。

二年目を迎えた今年度の事業計画として、県連組織の基礎づくりを行うことにしており、その一環として商青連の特別会員に加入した。

また、海外視察研修事業として近年、目を見張る発展をしている東南アジア、特に台湾、香港、シンガポール、韓国等のNIES諸国に目を向け、今回は台湾を取り上げた。現地の経済情勢、商工業の発展状況の視察を重点に置き、六月七日から十日の三泊四日の研修旅行を行った。

内容としては、台北の世界貿易センタービルの視察と、青年部の会員と同年代の台北の若手経済人との会議をヒルトンホテルで行った。会議への台北側の出席者は、車のレンタルリース業、事務機等の販売業、生命保険業、合金玩具の輸出業、レストラン経営の飲食業などの業種の六人の経営者の方々であった。

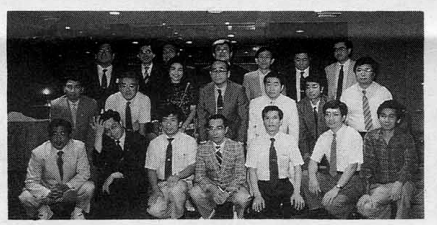
貿易センタービルでは、旅行社にビジターではなく、バイヤーとして登録するように頼み、パンフレット等をいただいた。日本に追い付け、追い越せという意気込みに、今さらながら、商品的なものを含めて脅威を感じた。

会議の席でも、お互いに仕事のこと、日本のこと、台湾のことなど、時間が足りないほどの討論会ができ、成果を収めてきた。

また、七月九日には、宇和島青年部の主管で第八回商工会議所青年部愛媛地区会員大会を開催した。記念講演には、ジャスコ株式会社代表取締役会長で東京商工会議所副会頭でもある岡田卓也氏をお迎えした。この大会で、県下の会員相互の交流を深めることができた。

今後の予定としては、伊賀愛媛県知事との各地青年部要望事項についての懇談会、将来の展望をにらんで、豊予海峡を隔てている大分県連との交流会、青年部設置率第一位の四国の中で、愛媛県の三力所（松山、伊予三島、川之江）の青年部未設置商工会議所に対する設置促進など、数多くの事業を推進したいと考えている。

最後に、今年度の第九回全国大会が四国ブロックの高知で行われる。是非、多数の参加を同じブロックとしてお願いします。



▶「よろしく」（愛媛県連）

商青連役員　石川日商会頭と懇談

商青連は七月二十七日、日本商工会議所の石川会頭との懇談会を開催した。懇談会には、商青連側から石川会長をはじめとする正副会長のほか、広報委員会所属役員が世話役として出席。①商工会議所青年部に期待すること、②青年経済人に期待すること。そして今、青年経済人は何をすべきか、③各地商工会議所における青年部の位置付け――などについて、一時間にわたって懇談した。

商青連として石川会頭との懇談会を行ったのは今回が初めてで、石川会頭から青年部に対する示唆に富むアドバイスがあったほか、「大変いい機会だった。これからも、会議所全体の活性化のために共に努力していきましょう」との感想をいただくなど、大変有意義な懇談会となった。

以下に、この内容を紹介する。

商青連側出席者

会長	石川正一	副会長 小林幹生
副会長	奥田利明	〃 水尾一二
〃	鈴木隆則	〃 町田雅之
〃	中島英一	理事 宮城達男
〃	山本晃正	〃 友田幸雄
〃	深川寛治	〃 渡辺隆一
		〃 和田均
		〃 三輪征司

石川六郎（いしかわ　ろくろう）　鹿島建設㈱取締役会長。大正十四年東京生まれ。昭和二十三年東京大学工学部卒。同年運輸省入省。三十年鹿島建設㈱取締役、五十三年取締役社長、五十九年取締役会長。六十年十二月第十五代日商会頭に就任。工学博士。（写真は商青連役員との懇談会で）

▲石川日商会頭を囲んだ商青連役員（懇談会会場で）

司　会　今日は、石川日商会と商青連役員との懇談会ということ、早速始めさせていただきます。まず最初に、商青連の石川会長から挨拶をお願いします。

商青連　おはようございます。本日は、私たちの念願でありました日商工会議所の石川会頭と、私たち商青連の役員との懇談会が実現いたしましたことを、心から喜んでおります。また、会頭には公私とも大変お忙しい中、私たち青年部のために、このようにお時間をお繰り合わせいただきまして、役員の代表としまして、心より感謝を申しあげたいと思います。

商青連も設立から七年目を迎え、今年度は『拡げよう友情の輪・創ろう新時代の日本』というスローガンを掲げまして、我が地域に潤いを、そしてまた次代の日本を背負えるような青年に、ということで日夜研鑽向上を続けているわけでございますけれども、去年の山口での全国大会には、会頭にもご出席をいただきまして、青年部も大変力強く思っている次第でございます。今後とも会頭のご指導を仰ぎながら、また事務局と協力しながら、日本商工会議所の方針に従って、自らの研鑽向上、そして地域の活性化のために頑張っていく所存でございますので、よろしくご指導をお願いいたします。

また、我が青年部の今後の活動方針を決める、あるいはその方向性を決めるにおいて、今日は、非常に意義ある懇談会になると考えておりますので、よろしくお願いいたしまして、代表としてのご挨拶とさせていただきます。

司　会　本日の懇談会の目的は、ご案内のように、商青連の機関紙であります「翔生」に二ページにわたって、この懇談会の内容を掲載する予定にいたしております。そういうことで、こちらで用意いたしました六項目の質問を最初にさせていただきますので、どうかよろしくお願いしたいと思います。

青年経済人は　大きなビジョン持て

商青連　まず最初に、我々商工会議所青年部に対して、何を期待されておられますか。

会　頭　将来の商工会議所をしょって立つ、その中核的な諸君ですから、そういう意味で皆さん方の切磋琢磨による努力を当然期待しております。

商青連　我々、若手経営者でございますが、その青年経済人である我々に対して期待すること、そして今、青年経済人は何をすべきかということを、ご示唆いただければと思います。

会　頭　基本的に、経営者なんだから、足が地に着いていなければダメです。しかし、こういうふうに非常に流動的に躍進するというか、変動するイノベーションの時代、技術革新の時代ですから、二十一世紀に向けて日本がどういうふうになっていくべき、その中で自分たちが持っている事業をどういうふうに伸ばしていくべきか、あるいは変貌させていくべきか、という大きなビジョンを持っている必要があるんですね。

しかし、そのためには、逆に言いますと、非常に広い視野から物を見て判断できる良識が必要だと思う。これは、お互いの切磋琢磨並びに自分の勉強ですよね。今、貿易摩擦その他の様子を見ていましても、歴史とか文化とか伝統の違いというものはあるけれども、日本の中の価値観しかしてきたというふうに思っています。

会　頭　基本的には、あなた方が盛り上がる力でつくっていかなければしょうがないんですね。やっぱり、呼びかけに呼応してくる者がいないとね。それがいいものであれば、すぐに認知されますよ。だから、先ほど私が余り無理してやるなといったのはそういう意味で、やる気がない人を引っ張り込んでも、組織全体がダメになりますから。

商青連　先ほどの四番目の項目である、日商における商青連の位置付けについて付随することですが、会頭のお話の中に、六十年十二月に通産省の通達によって青年部を、定款に明記してもよろしいというふうになったということでございますけれども、私は浜松で、浜松は大変親会が青年部に対して理解がありまして、「常議員会にも出てこいよ」と、いろんな形でバックアップをしてもらっているわけです。

こうして商青連に出てきまして、各単会の皆さん方と話をしますと、今、青年部が置かれている立場が、地域によって、単会によって、かなり違うなというところがあるわけですね。その辺は、これから逐次時間をかけて全国的に平均化されていく形なのか、それとも、それは各地の会議所に任せてあるから、日商として画一した形での青年部を希望する――というたらおかしいんですけれども、そういう考え方はあるのか、ないのか、というところをちょっとお聞かせ願えますか。

会　頭　さっき言ったように、定款に盛り込むような方向がいいだろうと言っているわけです。そういう方向です。それから、常議員会とか総会とか、そういうときにどうするかということだけれども、これは出るとしてもオブザーバーでしょうね。

商青連　そうですね。オブザーバーとして今、出させてもらっていますけれども。その辺は、日商の考え方として、各地の商工会議所の方へは、そういう考え方を持っているとの連絡というか、そういうものは、もう、されているんですよ。

会　頭　いや、今までは、やっていませんけれども、今、こういう話があったから、そういうことを希望しているということは言いましょう。強制するわけにはいかないですけれどもね。

商青連　ありがとうございました。

ところで、先ほど会頭が申されました通り、青年部は基本的には親会の枠の中で活動をということになりますが、これをずっと突き詰めていくと、青年部に参加していく流れの中で、自分の意見が商工会議所に反映されていくということが一つの励み、ないしは将来的な訓練になっていくというふうに考えるわけです。

しかし、現状はそれぞれの青年部がまだ独自に活動している状態でして、青年部の中にあっては、何で会議所の青年部なのか、JCがあるのに、商工会議所に青年部が必要なのか、という議論さえある状態で、これを将来的に商工会議所の青年部なんだ、ということを確立していくには、商工会議所の一つの方針決定の場に、青年部が何らかの形で立ち会えるというようなことがあると、随分励みになるのではないでしょうか。

これ、いろいろな意見なりを通ずるチャンネルは二つあるわけで、一つは自分のところの商工会議所に対してやる、それはその地区の問題が多いでしょうね。

それから、日本全体の問題は、そのために商青連があるわけで、今日みたいに商青連という組織を通じて日商に持ってこられたらいい。意見でも希望でも、何でもどんどん出されたらいいですよ。

青年部は盛り上がる力で

商青連　現在、青年部が商工会議所の中で、三百二十も設置されましたけれども、その中で一番私たちの悩みの種になっていることは、大きい商工会議所になればなるほど、その設立が難しく、設置されていないことです。

例えば、県都の商工会議所の方が青年部が設置されていないという状況なんですけれども、これは先輩方が余りにも偉過ぎて、青年の出る幕がなくなっているのではないかなというような感じもしているのですが、これについて親会の立場から、もっと積極的につくってもらうよう、何らかの格好で上の方から指示をしていけば、その設置促進もかなり図られるのではないかな　というような考え方を持っているんです。そのような意味で、是非またお力を貸していただきたいというふうに思っています。

商青連　それから、各地の商工会議所に我々青年部があるわけですけれども、その商工会議所の青年部の位置付けについて、どのようなお考えをお持ちですか。

会　頭　会議所の中にあるんですから、商工会議所法で定められた内容によって動いてもらう必要があると思います。今、だいぶ、青年部が増えてきましたけれども、それぞれの会議所によっていろいろ決め方があるのではないか――一応、昭和六十年十二月に通産省の通達で、会議所の事情に応じて定款に明記してもよろしいということになっているわけですけれども、まだたくさんいらっしゃいますけれども、例えば議員総会とか、あるいは常議員会の承認を得て設立されたものが多いわけです。こういうふうなものを、もっ少しっかり定款のうえでうたって、正式に認知するといいますか、そういうような形に進んでいくべきだろうと思います。

会議所から遊離した活動はダメ

商青連　その各地の青年部から、我々はこうして代表で商青連に出向してきているわけですけれども、日本商工会議所における商青連の位置付けというのは、どういうものでございましょうか。

会　頭　これも今、申しあげたように、基本的には商工会議所法にのっとったうえでの活動でなければならない。商工会議所から遊離したものではいけないですね。しかし、その中で、先ほど申しあげたように、商青連として、商工会議所の青年部の位置付けについて、どのようなお考えをお持ちですか。

石川会頭

会　頭　これは、余り無理をしてはいけないと思いますね。本当に自主的に、その商工会議所の内部でやっていこうというような声が出てこないとできないですね。設置をどんどん進めていくことは結構ですよ。大いにやっていただいたらいいと思います。

商青連　それから、最後の質問になるかと思いますけれども、現在、全国に約二万三千人の青年部会員がいるわけですが、各会議所青年部によって意識がさまざまであるわけですね。将来は、あなた方が中心になって、会議所をやっていくんだろう、そういう意味で非常に期待しています。

商青連　我々は、若手経営者としてはいけないような時代、いわゆるボーダレスエコノミ――国境のない経済ですね。だから、税制でもそうですし、法律でもそうですし、どうしても世界に納得してもらえるような形に切り換えていかなければいけない。

そうなった場合に、日本はどうなっていくのか、ということを常に勉強して、その先を見て、そちらの方向に手を打っていかないといけない。これが若い人たちの特権でもあるし、また義務でもあると思いますね。

商青連　それから、各地の商工会議所の青年部が増えてきましたけれども、それぞれの会議所によっていろいろ決め方があるのではないか――一応、昭和六十年十二月に通産省の通達で、会議所の事情に応じて定款に明記してもよろしいということになっているわけですけれども、まだたくさんいらっしゃいますけれども、例えば議員総会とか、あるいは常議員会の承認を得て設立されたものが多いわけです。こういうふうなものを、もっ少しっかり定款のうえでうたって、正式に認知するといいますか、そういうような形に進んでいくべきだろうと思います。

会　頭　これは、余り無理をしてはいけないと思いますね。本当に自主的に、その商工会議所の内部でやっていこうというような声が出てこないとできないですね。設置をどんどん進めていくことは結構ですよ。大いにやっていただいたらいいと思います。

商青連　それから、最後の質問になるかと思いますけれども、現在、全国に約二万三千人の青年部会員がいるわけですが、各会議所青年部によって意識がさまざまであるわけですね。将来は、あなた方が中心になって、会議所をやっていくんだろう、そういう意味で非常に期待しています。

商青連　我々、若手経営者としてはいけないような時代、いわゆるボーダレスエコノミ――国境のない経済ですね。だから、税制でもそうですし、法律でもそうですし、どうしても世界に納得してもらえるような形に切り換えていかなければいけない。

そうなった場合に、日本はどうなっていくのか、ということを常に勉強して、その先を見て、そちらの方向に手を打っていかないといけない。これが若い人たちの特権でもあるし、また義務でもあると思いますね。

会　頭　基本的には、あなた方が盛り上がる力でつくっていかなければしょうがないんですね。やっぱり、呼びかけに呼応してくる者がいないとね。それがいいものであれば、すぐに認知されますよ。だから、先ほど私が余り無理してやるなといったのはそういう意味で、やる気がない人を引っ張り込んでも、組織全体がダメになりますから。

商青連　先ほどの四番目の項目である、日商における商青連の位置付けについて付随することですが、会頭のお話の中に、六十年十二月に通産省の通達によって青年部を、定款に明記してもよろしいというふうになったということですけれども、私は浜松で、浜松は大変親会が青年部に対して理解がありまして、「常議員会にも出てこいよ」と、いろんな形でバックアップをしてもらっているわけです。

こうして商青連に出てきまして、各単会の皆さん方と話をしますと、今、青年部が置かれている立場が、地域によって、単会によって、かなり違うなというところがあるわけですね。その辺は、これから逐次時間をかけて全国的に平均化されていく形なのか、それとも、それは各地の会議所に任せてあるから、日商として画一した形での青年部を希望する――というたらおかしいんですけれども、そういう考え方はあるのか、ないのか、というところをちょっとお聞かせ願えますか。

会　頭　さっき言ったように、定款に盛り込むような方向がいいだろうと言っているわけです。そういう方向です。それから、常議員会とか総会とか、そういうときにどうするかということだけれども、これは出るとしてもオブザーバーでしょうね。

商青連　そうですね。オブザーバーとして今、出させてもらっていますけれども。その辺は、日商の考え方として、各地の商工会議所の方へは、そういう考え方を持っているとの連絡というか、そういうものは、もう、されているんですよ。

会　頭　いや、今までは、やっていませんけれども、今、こういう話があったから、そういうことを希望しているということは言いましょう。強制するわけにはいかないですけれどもね。

商青連　ありがとうございました。

ところで、先ほど会頭が申されました通り、青年部は基本的には親会の枠の中で活動をということになりますが、これをずっと突き詰めていくと、青年部に参加していく流れの中で、自分の意見が商工会議所に反映されていくということが一つの励み、ないしは将来的な訓練になっていくというふうに考えるわけです。

しかし、現状はそれぞれの青年部がまだ独自に活動している状態でして、青年部の中にあっては、何で会議所の青年部なのか、JCがあるのに、商工会議所に青年部が必要なのか、という議論さえある状態で、これを将来的に商工会議所の青年部なんだ、ということを確立していくには、商工会議所の一つの方針決定の場に、青年部が何らかの形で立ち会えるというようなことがあると、随分励みになるのではないでしょうか。

これ、いろいろな意見なりを通ずるチャンネルは二つあるわけで、一つは自分のところの商工会議所に対してやる。それはその地区の問題が多いでしょうね。

それから、日本全体の問題は、そのために商青連があるわけで、今日みたいに商青連という組織を通じて日商に持ってこられたらいい。意見でも希望でも、何でもどんどん出されたらいいですよ。

青年としての自覚なければ定年

商青連　一つお聞きしたいのは、年齢制限といいますか、青年部の定年のあり方といいますか、これは当然JCと絡んでくる問題なんですけれども。

今日の正副会長の中でもJCのOBもいらっしゃるし、私はまだ両方とも入っていますけれども、商工会議所の青年部は、将来の商工会議所を背負って立たなければいけない。それは重々思っているところなんですけれども、JCで四十歳まで勉強して、それを卒業したらロータリーとかライオンズとか、そういう社会団体しかない。その中で、商工会議所青年部が永野元会頭のお声がけで全国につくられた。

では、商工会議所の青年部というのは、現状は定年は四十歳とか、四十五歳、あるいは五十歳ぐらいまでありますけれども、果たしてどの程度を目安にして青年部でいいのかということ。それから、その上は常議員とか、会頭、副会頭になって頑張れよ、という場合も出ています。

それから、JCとの絡みですね。大都市でできない、それに対する先ほどの会頭のお答えは、横のつながりでそういう機運を盛り上げていなければいけないのではないか、というお話なんですけれども、六十三年度に行ったアンケート調査の結果によりますと、大都市でできていないのは、JCがあるからいらないんだという回答が多くんです。ただし、JCは四十歳ですよね。失礼ですけれども、四十歳までの人間で、今のこういう複雑な世の中で何をなし得るかというのは、ある程度決まってくるのではないでしょうか。

逆に言えば、商工会議所青年部では、今、四十五歳の定年が一番多いんですけれども、そういうJCを卒業して、本当の実業と結びついたところでの経済活動ができる、地域活動ができる、そういうのが商工会議所の青年部のあり方ではないのか、と自分なりにはとらえているんですけれども、この点についてはいかがなものでしょうか。

会　頭　私は、商工会議所青年部とJCというものとは別だと思いますよ。ご存知のように、JCというのは職業を問わない。だから、少ない例だけれども、例えば裏千家の宗匠でも会頭になったし、商工会議所とは別ですよ。だから、JCを卒業したから青年部に入っている人もいるかもしれない、それは構いませんけれども。

したがって、今、全国の商工会議所の会頭の二割五分ぐらいがJC経験者かな。だけれども、私はJCの基本的にはそういうふうな商工会議所の議員のあり方というのも、将来に向けてそろそろ考えていってもいいのではないかな、という感じもしたまにするときはあるんですけどね。

会　頭　確かに議員の中でも、実際にアクティブに動く人と、名前だけの人とがいると思います。これは、やっぱり徐々に変えていかなければいけないでしょうね。

商青連　ですから、そのような意味では、例えば婦人部とか青年部とかいうようなところから、全国で活発にやっているところの資料を大いに地域の方に反映させて、青年部から一人でも常議員とか出すとか、婦人部からも常議員というふうに、いろいろと情報交換し、議員の中で交流が常に――青年部の場合は任期はほとんど一年であるわけですから、その一年単位で変わっていくというようなシステムをとっていけば、もっともっと活性化してくるのではないかと思うんです。

会　頭　だから、それは皆さん方がやればいいんですよ。

商青連　はい、頑張ります。

高岡での全国大会だったんですけれども、当時の日商の永野元会頭は、「各地の商工会議所の活性化のために青年部をつくらなければいけない。それで、君たち青年部が各地にできて、商工会議所を活性化するとともに地域も活性化してほしい」ということを言われました。そう受け取っているんですけれども……。

会　頭　結構です。そのとおりだと思うな。

商工会議所は日本経済そのもの

商青連　今の商工会議所を、会頭として見られてどうですか。

会　頭　私はまだ就任したばかりだから詳しいことは申せませんけれども、会議所自体が会議所の存在意義を相当認識し出していると思いますよ。その例が税ですよ。税の問題というのは、各企業に直接響く問題です。例えば、売上税で反対したでしょう。それで、それによって廃案になった。これで、商工会議所の力というものは、組織というものは強いんだな、とみんなが認識したんじゃないですかね。

それから、今度、消費税について、これは条件付きで賛成した。これは私になってからやったんだけれども、これも全国に問い合わせて、まず基本的に――商工会議所というのは、今、三百六十数万人の会員がいるわけですから、その大中小、言うなれば日本の経済、産業そのものですよ。全部じゃないけど、だから、それの願望するところと、政府の経済政策とが乖離してしまうということは、極めてよくない。なるべく一緒にいくべきなんですね。

″大変いい機会だった″　連絡とり合いながら活性化へ

商青連　石川会頭、大変お元気そうなんですけれども、何か健康の秘訣みたいなものがあったら、お聞かせ願えますか。

会　頭　いやいや、だんだんに衰えてきております。（笑）

そうですねえ。やっぱりほどほどでしょうね、食べるのも、飲むのも。やっぱりスポーツをした方がいいですね。

商青連　会頭さん、今年も十一月十七日は高知で全国大会がございますので、是非また時間をお繰り合わせいただきまして、ご出席を願いします。

会　頭　できるだけ行きたいと思っています。

商青連　よろしくお願いいたします。

司　会　それでは、あっという間の一時間でございました。十二時までという制限がございましたので、これで質問または懇談を終わりたいと思います。

◀挨拶する石川商青連会長

最後に、石川会頭の方から本日の懇談会の感想または、ご挨拶をお願いできたらと思います。

会　頭　大変いい機会だったと思います。お互いに意見交換ができ、なかなかいいアイデアも出てきましたし、これからもよく連絡をとり合いながら、ひとつ会議所全体の活性化のために努力していきましょう。

商青連　よろしくご指導をお願いいたします。

司　会　では、以上をもちまして懇談会を終了いたします。どうもありがとうございました。

会　頭　全国の皆さんによろしく。

しくご指導をお願いいたします。

また、我が青年部の今後の活動方針を決める、あるいはその方向性を決めるにおいて、今日は、非常に意義ある懇談会になると考えておりますので、よろしくお願いいたしまして、代表としてのご挨拶とさせていただきます。

司　会　本日の懇談会の目的は、ご案内のように、商青連の機関紙であります「翔生」に二ページにわたって、この懇談会の内容を掲載する予定にいたしております。そういうことで、こちらで用意いたしました六項目の質問を最初にさせていただきますので、どうかよろしくお願いしたいと思います。

商青連　それから、各地の商工会議所に我々青年部があるわけですけれども、その商工会議所の青年部の位置付けについて、どのようなお考えをお持ちですか。

会　頭　会議所の中にあるんですから、商工会議所法で定められた内容によって動いてもらう必要があると思います。今、だいぶ、青年部が増えてきましたけれども、それぞれの会議所によっていろいろ決め方があるのではないか――一応、昭和六十年十二月に通産省の通達で、会議所の事情に応じて定款に明記してもよろしいということになっているわけですけれども、まだたくさんいらっしゃいますけれども、例えば議員総会とか、あるいは常議員会の承認を得て設立されたものが多いわけです。こういうふうなものを、もっ少しっかり定款のうえでうたって、正式に認知するといいますか、そういうような形に進んでいくべきだろうと思います。

会　頭　これは、余り無理をしてはいけないと思いますね。本当に自主的に、その商工会議所の内部でやっていこうというような声が出てこないとできないですね。設置をどんどん進めていくことは結構ですよ。大いにやっていただいたらいいと思います。

商青連　それから、最後の質問になるかと思いますけれども、現在、全国に約二万三千人の青年部会員がいるわけですが、各会議所青年部によって意識がさまざまであるわけですね。将来は、あなた方が中心になって、会議所をやっていくんだろう、そういう意味で非常に期待しています。

商青連　我々、若手経営者としてはいけないような時代、いわゆるボーダレスエコノミ――国境のない経済ですね。だから、税制でもそうですし、法律でもそうですし、どうしても世界に納得してもらえるような形に切り換えていかなければいけない。

そうなった場合に、日本はどうなっていくのか、ということを常に勉強して、その先を見て、そちらの方向に手を打っていかないといけない。これが若い人たちの特権でもあるし、また義務でもあると思いますね。

商青連　現在、青年部が商工会議所の中で、三百二十も設置されましたけれども、その中で一番私たちの悩みの種になっていることは、大きい商工会議所になればなるほど、その設立が難しく、設置されていないことです。

例えば、県都の商工会議所の方が青年部が設置されていないという状況なんですけれども、これは先輩方が余りにも偉過ぎて、青年の出る幕がなくなっているのではないかなというような感じもしているのですが、これについて親会の立場から、もっと積極的につくってもらうよう、何らかの格好で上の方から指示をしていけば、その設置促進もかなり図られるのではないかな　というような考え方を持っているんです。そのような意味で、是非またお力を貸していただきたいというふうに思っています。

会　頭　基本的には、あなた方が盛り上がる力でつくっていかなければしょうがないんですね。やっぱり、呼びかけに呼応してくる者がいないとね。それがいいものであれば、すぐに認知されますよ。だから、先ほど私が余り無理してやるなといったのはそういう意味で、やる気がない人を引っ張り込んでも、組織全体がダメになりますから。

商青連　先ほどの四番目の項目である、日商における商青連の位置付けについて付随することですが、会頭のお話の中に、六十年十二月に通産省の通達によって青年部を、定款に明記してもよろしいというふうになったということですけれども、私は浜松で、浜松は大変親会が青年部に対して理解がありまして、「常議員会にも出てこいよ」と、いろんな形でバックアップをしてもらっているわけです。

こうして商青連に出てきまして、各単会の皆さん方と話をしますと、今、青年部が置かれている立場が、地域によって、単会によって、かなり違うなというところがあるわけですね。その辺は、これから逐次時間をかけて全国的に平均化されていく形なのか、それとも、それは各地の会議所に任せてあるから、日商として画一した形での青年部を希望する――というたらおかしいんですけれども、そういう考え方はあるのか、ないのか、というところをちょっとお聞かせ願えますか。

会　頭　さっき言ったように、定款に盛り込むような方向がいいだろうと言っているわけです。そういう方向です。それから、常議員会とか総会とか、そういうときにどうするかということだけれども、これは出るとしてもオブザーバーでしょうね。

商青連　そうですね。オブザーバーとして今、出させてもらっていますけれども。その辺は、日商の考え方として、各地の商工会議所の方へは、そういう考え方を持っているとの連絡というか、そういうものは、もう、されているんですよ。

会　頭　いや、今までは、やっていませんけれども、今、こういう話があったから、そういうことを希望しているということは言いましょう。強制するわけにはいかないですけれどもね。

商青連　ありがとうございました。

ところで、先ほど会頭が申されました通り、青年部は基本的には親会の枠の中で活動をということになりますが、これをずっと突き詰めていくと、青年部に参加していく流れの中で、自分の意見が商工会議所に反映されていくということが一つの励み、ないしは将来的な訓練になっていくというふうに考えるわけです。

しかし、現状はそれぞれの青年部がまだ独自に活動している状態でして、青年部の中にあっては、何で会議所の青年部なのか、JCがあるのに、商工会議所に青年部が必要なのか、という議論さえある状態で、これを将来的に商工会議所の青年部なんだ、ということを確立していくには、商工会議所の一つの方針決定の場に、青年部が何らかの形で立ち会えるというようなことがあると、随分励みになるのではないでしょうか。

これ、いろいろな意見なりを通ずるチャンネルは二つあるわけで、一つは自分のところの商工会議所に対してやる。それはその地区の問題が多いでしょうね。

それから、日本全体の問題は、そのために商青連があるわけで、今日みたいに商青連という組織を通じて日商に持ってこられたらいい。意見でも希望でも、何でもどんどん出されたらいいですよ。

商青連　今の商工会議所を、会頭として見られてどうですか。

会　頭　私はまだ就任したばかりだから詳しいことは申せませんけれども、会議所自体が会議所の存在意義を相当認識し出していると思いますよ。その例が税ですよ。税の問題というのは、各企業に直接響く問題です。例えば、売上税で反対したでしょう。それで、それによって廃案になった。これで、商工会議所の力というものは、組織というものは強いんだな、とみんなが認識したんじゃないですかね。

それから、今度、消費税について、これは条件付きで賛成した。これは私になってからやったんだけれども、これも全国に問い合わせて、まず基本的に――商工会議所というのは、今、三百六十数万人の会員がいるわけですから、その大中小、言うなれば日本の経済、産業そのものですよ。全部じゃないけど、だから、それの願望するところと、政府の経済政策とが乖離してしまうということは、極めてよくない。なるべく一緒にいくべきなんですね。

商青連　石川会頭、大変お元気そうなんですけれども、何か健康の秘訣みたいなものがあったら、お聞かせ願えますか。

会　頭　いやいや、だんだんに衰えてきております。（笑）

そうですねえ。やっぱりほどほどでしょうね、食べるのも、飲むのも。やっぱりスポーツをした方がいいですね。

商青連　会頭さん、今年も十一月十七日は高知で全国大会がございますので、是非また時間をお繰り合わせいただきまして、ご出席を願いします。

会　頭　できるだけ行きたいと思っています。

商青連　よろしくお願いいたします。

司　会　それでは、あっという間の一時間でございました。十二時までという制限がございましたので、これで質問または懇談を終わりたいと思います。

最後に、石川会頭の方から本日の懇談会の感想または、ご挨拶をお願いできたらと思います。

会　頭　大変いい機会だったと思います。お互いに意見交換ができ、なかなかいいアイデアも出てきましたし、これからもよく連絡をとり合いながら、ひとつ会議所全体の活性化のために努力していきましょう。

商青連　よろしくご指導をお願いいたします。

司　会　では、以上をもちまして懇談会を終了いたします。どうもありがとうございました。

会　頭　全国の皆さんによろしく。

会　頭　商青連は創立五周年記念事業として「綱領一指針」をまとめたそうですが、やはりこういうふうなものをはっきりさせなければいけない。JC（青年会議所）の話になりますけれども、JCには「綱領」があるわけですが、たしかわ私が日本JCの会頭だった昭和三十五年頃につくったものです。JCの場合には、リーダーシップトレーニングとサービスとフレンドシップでしたか、アメリカの考え方が入ってきたわけなのですけれども、何を優先すべきかというときに、例えば親睦を優先すべきだ、サービスを優先すべきだ、あるいはトレーニングを優先すべきだ、といういろいろな考え方、意見がありました。

ところが、親睦云々、特にサービスというと、ロータリーとか、ああいうものに近くなっちゃうんです。それではいけないということで、さんざん論議をして、私のときにつくったんです。ところで、皆さん方、集まったときに、声を出してこれを読んでいますか。

商青連　はい。

会　頭　やっぱり頭にたたき込むには、みんなで声をあげて読ませたらいいんですね。そういうことによって、行くべき方向がはっきりする――会社でもそうですよ。社是というものをつくって、これを社員全員がよく理解していないと、方向が誤ってきますね。

す。その意識を高めるというか、高揚することについての意見がございましたら、お聞かせください。

会　頭　商青連は創立五周年記念事業として「綱領一指針」をまとめたそうですが、やはりこういうふうなものをはっきりさせなければいけない。JC（青年会議所）の話になりますけれども、JCには「綱領」があるわけですが、たしかわ私が日本JCの会頭だった昭和三十五年頃につくったものです。JCの場合には、リーダーシップトレーニングとサービスとフレンドシップでしたか、アメリカの考え方が入ってきたわけなのですけれども、何を優先すべきかというときに、例えば親睦を優先すべきだ、サービスを優先すべきだ、あるいはトレーニングを優先すべきだ、といういろいろな考え方、意見がありました。

ところが、親睦云々、特にサービスというと、ロータリーとか、ああいうものに近くなっちゃうんです。それではいけないということで、さんざん論議をして、私のときにつくったんです。ところで、皆さん方、集まったときに、声を出してこれを読んでいますか。

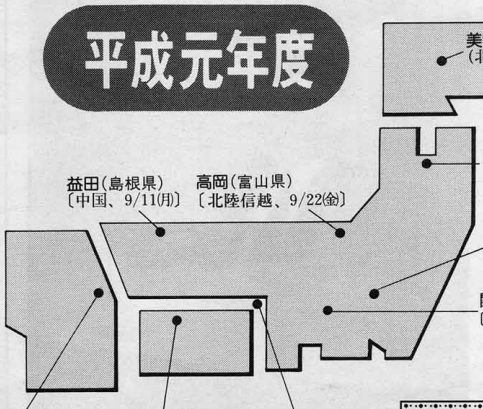
商青連　はい。

会　頭　やっぱり頭にたたき込むには、みんなで声をあげて読ませたらいいんですね。そういうことによって、行くべき方向がはっきりする――会社でもそうですよ。社是というものをつくって、これを社員全員がよく理解していないと、方向が誤ってきますね。

運営研究会リポート

全国商工会議所青年部連合会と日本商工会議所は八月から十月にかけ、全国九ヵ所でブロック別の運営研究会を開催した。いずれのブロックも「商工会議所活動に果たす青年部の役割」（平成元年度統一テーマ）などをテーマとした分科会をはじめ全体会議、記念講演、懇親会、エキスカーションなどを実施、地域の枠を超えた青年部相互の交流の輪が拡がった。以下に、各ブロックの主管青年部から報告いただいた内容を紹介する。

平成元年度



北海道ブロック　美唄商工会議所青年部

北海道単独では、第二回目の主管開催となった、美唄商工会議所青年部は、当初より道商連・鈴木茂会頭のご出席をいただくことを目標に、簡素の中にも実のある研究会にしようと実行委員会を設置し、五グループに分け、数多くの会議を開催し、当日は、当会議所青年部のメンバー七十人の出席をもって、全道の仲間を迎えた。

北海道は、青年部の設置率がまだ三五％と低率であり、全国平均六四・八％を大きく下回っているため、特に今回は、鈴木会頭にこの状況を把握していただき、今後、未設置会議所に対し青年部設置を強く要請していただくことになった。

さて、遠来の仲間とは、初対面の人が多かったが、時間が経つにつれてすぐ仲間意識が生まれ、和気あいあいの雰囲気になり、地域の情報交換が始まった。

分科会は統一テーマの他に第二分科会「地域はイベントでよみがえるか」、第三分科会は「異業種交流の推進」というテーマで熱心な討議が行われた。

分科会は二時間の持ち時間であるが、合同会議、会場移動時間、グループリーダによるとりまとめ会議等に時間がとられ、実質一時間十五分位という短時間になってしまい、発言のチャンスがなく、不満の声もあったのではないかと思われるので、次回より分科会のタイムスケジュールについて十分検討していただきたい。

第三部の道商連会頭・鈴木茂氏の講話は、一つのテーマにこだわることなく、日本の政治状況、あるいは人生経験にまつわるお話、そして分科会のテーマは研究会の時だけ討議されるものではなく、日常の青年部活動の中でとりあげる問題点であると示唆され、高い評価を受けた。

第四部の懇親会は、余るのではないかと予想された料理も、あっという間になくなってしまい、その食欲旺盛さに驚いた。また、PRタイムでは、高知県青年部連合会より女性一人と坂本竜馬に扮する会員を含め、総勢八人の会員が高知市で開催される全国大会のPRで花を添えてくれた。

最後に、奥田ブロック会長の手締により、来年の開催地・遠軽での再会を約束し、「ご苦労さん、ありがとう」と言ってくれた遠来の仲間に感謝しながら終了した。

東北ブロック　青森商工会議所青年部

「北の時代―創ろう人のネットワーク」を大会テーマに、第八回東北ブロック商工会議所青年部運営研究会が十月一日、青森市で開催された。

主管の青森商工会議所青年部（中村公英部会長）は、前年の山形県長井大会で次期開催地に決定して以来、大会開催に向けて周到な準備を進めてきた。四月から成家竹美運営委員長を隊長とするキャラバン隊を組織し、東北各県青年部の年度総会をはじめとするいろいろな機会をとらえ、積極的に青森大会への参加要請を展開してきた。

その成果は、東北全三十七青年部の総参加のかたちで表われ、最終の参加登録は五百二十七人にのぼった。また今後、青年部の設立を予定している青森県五所川原、岩手県水沢からもオブサーバーとして参加している。

青森大会は、従来の東北ブロック大会の開催要綱にほぼ準じたものであるが、新しい試みとして「業種別昼食会」が実施され、評判を集めた。

この業種別昼食会は、参加者を職業別に七業種に大別し、それぞれのグループ別に昼食会を行ったもの。昼食会グループはそのまま分科会グループに移行し、昼食会でお互い顔見知りになったことから、分科会でも遠慮のない意見が出されるなど、予想を越える好結果を生んだ。

昼食会では各テーブルに、地元青森青年部の部員が座長としてつき、名刺交換、自己紹介、一口コメントを行ったあと、雑談に移る。仕事が同じという親近感から初対面とは思えぬなど話がはずみ、あっという間に予定の時間が過ぎ、話の続きは夜の懇親会で―との約束を交すグループも出た。

メインの分科会は、青森青年部が実際に行った事業を講師が紹介、説明し、質問を受けるかたちで展開された。

青森青年部は発足当初から形式的な事業ではなく、より実質的な事業の実現を目指してきた経緯があり、分科会ではその具体的な事業が発表された。

第一分科会（街づくり）では、遠藤洋介理事がこの八月に青森市で開かれた「国際デザイン会議」で青年部が担当した「雪国の都市デザイン」についてスライドを交じえながら説明した。

第二分科会（古里づくり）では、対馬忠雄副部会長が昨年夏の青函博に併せて開かれた「外ヶ浜フェスティバル」について語り、フェスティバルの内容とともに、当日二万人を動員できた背景、要因などについて説明した。

第三分科会（夢づくり）では、柳谷章二副部会長が自らも取締役専務に就任した「株式会社テレコム青森」として、大会終了時には参加青年部ごとに配布することができた。

北陸信越ブロック　高岡商工会議所青年部会

去る、九月二十二日、「拡げよう友情の輪　創ろう新時代の日本」のスローガンのもと、第九回北陸・信越ブロック運営研究会を、万葉のふる里・高岡市で開催したところ、五百人余の参加をいただき、大過なく無事終了することができた。

さて、今回の大会を主管するに当たり、最も重点を置いたのは「分科会」であった。単なる式典や講演会という主管側の一方通行に終始せず、全員参加の大会を行いたいという趣旨のもとに、まず、分科会を商青連の統一テーマのほかに、「郷土づくりと青年部」、「なれあいからの脱皮・魅力ある青年部」というテーマを掲げ、三つに分けた。

さらに、各々の分科会をサブテーマを持った八つの小グループに細分化し、グループごとに討議を行い、かつ、その結果もまとめてもらった。その記録は、そのまま分科会報告書として、大会終了時には参加青年部ごとに配布することができた。

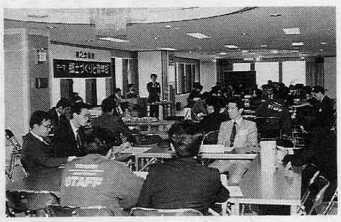
この運営により、会員個々に多くの意見発表の機会を与えることと、より具体的な視点からの討議を重ねることができ、会員の相互理解一強い参加意識の高揚が図れたのではないかと自負している。

また、記念講演会には㈱アシックス社長・鬼塚喜八郎氏をお招きし、「中小企業の活性化」をテーマに、自らの経営体験を通した力強いご講演をいただいた。講師のバイタリティーが聞き手に伝わり、聞き手の真剣さが講師に伝わる。それによって、さらに講師の話に力強さを増すという無言のコミュニケーションがこの講演会でなされていたのではないかと思う。

その後、全体会議、懇親会と続き、特に懇親会では我が高岡青年部会の音楽同好会メンバーによるバンド生演奏で会場も盛り上がり、雨の高岡での長くて熱い一日は終わった。

気が付いてみると、開催準備から運営に至るまでの労苦も、大会の終了とともに消え去り、この大会を主管できたことの喜びしか残っていない。心おきなく、次期開催予定の燕商工会議所青年部の皆さんにバトンをお渡しいたします。

最後になったが、何分不慣れなため、大会の運営に何かと行き届かない点も多々あったことと思うが、各青年部諸兄の厚い友情に免じて、ご容赦のほどお願い申し上げます。



▲第二分科会「郷土づくりと青年部」の会場内（高岡）

関東ブロック　桐生商工会議所青年部

「拡げよう友情の輪　創ろう新時代の日本」をスローガンとして開催された第九回関東ブロック商工会議所青年部運営研究会は、五十四会議所より七百一人の皆様の参加をいただき、九月八日、九日の両日、桐生商工会議所青年部の主管による開催された。

桐生市のイメージソング「ドリームガール」で皆様を迎え、群馬県警察音楽隊によるオープニングセレモニーで開会した。

第一部・式典は石川商青連会長、石川目商会頭らのあいさつで始まり、来賓挨拶、次期開催地発表等を行った。

第二部・記念講演は、「文化の嘘」をテーマにした㈱大川美術館理事長兼館長・大川栄二氏で、その内容は㈱ダイエーの経営、お客様の立場で考えるなど流通戦国時代に培った豊富な経験と智恵をもとに、経営と文化について独自の哲学と「心」の重要性を説いた。

さらに、第三部の分科会は、五つの分科会を企画。第一分科会は「商工会議所活動に果たす青年部の役割」をテーマに講師にマーケティングコンビナート主賓・今井俊博、㈱桐生地域地場産業振興センター専務理事・森山亨、佐啓産業㈱専務取締役・大槻圓次の三氏を迎えてディスカッション。会場は座談会風のセットで開かれ、青年部、または若手経営者として地域社会での活躍について語り合った。

また、第二分科会から第五分科会では会社訪問を実施。飯塚機業㈱・飯塚将春社長、第二分科会）、㈱平和（中島健吉社長、第三分科会）、森産業㈱（森喜美男社長、第四分科会）、㈱両毛システムズ（日野貞夫会長、第五分科会）と、インテリア、レジャー、バイオ、ハイテクとバラエティーに富んだ企業を選び、各々工場見学と代表者の生の経営談を聴き、分科会終了後は懇親会を行った。

エキスカーションは翌日に行われ、ゴルフは桐生カントリークラブでのコンペ、観光は小倉乳洞をはじめ、岩宿遺跡、大川美術館、苗蕉（昼食）、織物参考館「紫ゆかり」を見学、自然の神秘や美術、織物に触れ、独自の雰囲気での食事など参加者を魅了させた。

若手経営者に期待

松江商工会議所
会頭　大谷昌行

東海ブロック　関商工会議所青年部

「拡げよう友情の輪　創ろう新時代の日本」を大会スローガンに、平成元年度東海ブロック運営研究会を九月十三日、天下取りの先駆け・織田信長で知られる岐阜城眼下の長良川中流にある刃物のまち・岐阜県関市で開催したところ、東海三県より関係者三百人余の参加を得て、青年部の果たす役割などについて熱心に意見を交換、交流を深めた。

研究会では、二つの分科会に分かれ、第一分科会は「商工会議所活動に果たす青年部の役割」、第二分科会は「地域社会に果たす青年部の役割」をテーマにして、それぞれパネルディスカッション形式で討論した。このうち、第一分科会では、日本商工会議所小規模事業課長・坪田秀治氏より「商工会議所青年部の役割―明日は我が身―」と題した基調講演が行われた。

また、第二分科会では、めまぐるしく変化する経済社会の中で、青年部が次代を担うニューリーダーとして地域社会の発展のために何をすべきか、何が出来るかについて討論し交換を行った。

『分科会』では、第一分科会「商工会議所活動に果たす青年部の役割」をテーマに各青年部の事例発表により討論。第二分科会では「外国青年から見た日本」をテーマに、日本企業に働く外国青年四人をパネリストに迎え、パネルディスカッションを展開、さらに、第三分科会では「国際化時代を迎えての青年部活動の課題」をテーマに、前淡路勤労センター館長・片山雅夫氏を講師に迎え、熱心に質疑が交わされた。

近畿ブロック　洲本商工会議所青年部

平成元年度（第七回）近畿ブロック商工会議所青年部運営研究会は、洲本商工会議所青年部の主管で、八月二日、洲本市の県立淡路勤労センターで開催した。

日商を始め、石川商青連会長、県外からは高知並びに徳島青年部、さらに友好青年部としてこのたび、洲本と姉妹提携を結ぶことになった島根県大田青年部が調印式を兼ねて参加いただくなど、ブロック内外二十六会議所から三百二十余人の登録を得て、青年経済人として活発な意見交換を行った。

『分科会』では、第一分科会「商工会議所活動に果たす青年部の役割」をテーマに各青年部の事例発表により討論。第二分科会では「外国青年から見た日本」をテーマに、日本企業に働く外国青年四人をパネリストに迎え、パネルディスカッションを展開、さらに、第三分科会では「国際化時代を迎えての青年部活動の課題」をテーマに、前淡路勤労センター館長・片山雅夫氏を講師に迎え、熱心に質疑が交わされた。

四国ブロック　西条商工会議所青年部

第六回（平成元年度）四国ブロック商工会議所青年部運営研究会は九月三日、西条商工会議所青年部の主管により、西条商工会館で開催された。

前年度は、瀬戸大橋開通で活気溢れる坂出市（香川県）で開催されたが、それに比較して話題性にも乏しい当地での開催は、各地の青年部メンバーの方々に来ていただけるかどうか非常に心配した。幸いにも、二百九十人に余る参加をいただき、会場の設営、準備等を見直さざるを得なくなるなど、当青年部のメンバーは嬉しい悲鳴をあげたほどである。

計画に当たっては、西条らしいものを出そうと考えた。当日は、早朝八時より、宿泊先のホテルで会長朝食会を開催。その中で、石川商青連会長に卓話をいただき、式典に向けて気分を新たにした。

分科会は、四つの分科会に分かれた。第一分科会は、本年度の統一テーマである「商工会議所活動に果たす青年部の役割」だが、サブテーマとして〝悩める商店街に活路をもとめて〟を設け、当青年部メンバーで西条商店連盟会長でもある越智氏に、青年部活動を通して見つけた商店街活性化策である「西条五日市」について、スライドを使って講演いただき、それに対して参加者の議論を深めた。

第四分科会では、「見てみんかい　食べてみんかい　わしらの町の名物を」と題し、マイクロバスに乗って、観光牧場の茶室に会場を移し、持ち寄った各地の産品・名物の紹介や試食、お国自慢を行い、和気あいあいの雰囲気の中で、四国の再発見をした。

記念講演は、養老乃瀧グループ会長・木下藤吉郎氏をお迎えし、「勝利の人生　ここに道あり」と題し、バイタリティー溢れる講演をしていただいた。

これに先立って九月二日には、エキスカーション並びに前夜祭として「いもたき」を行ったが、あいにく雨天となり、十分に西条を楽しんでいただくことが出来なかったのは、非常に残念であった。

本大会を通して、当青年部メンバーが多くの知己を得、また内部的にも結束を固めることが出来たことなど、非常に有意義な大会であった。

中国ブロック　益田商工会議所青年部

中国ブロック運営研究会は九月十一日、益田市の石西県民文化会館に管内から二十三青年部三百三十三人の参加者を迎え、分科会、全体会議、懇親会の三部構成で開催された。

当初、開催日が月曜日ということで、経営者にとっては非常に参加しにくい日ということで、大変心配したが、皆様の熱い友情により、多数の参加をいただいたことに対し、心よりお礼申しあげる次第である。

さて、本研究会については昨年、鳥取で決定されて以来、十月に準備室を設け、それを本年四月に実行委員会へ移行させ、人口五万三千の島根の西のはずれの小さなまちの青年部として、何が出来るのかを検討し合い、参加していただいた方々に何かを持ち返っていただこうと考え、分科会にウエイトを置き、二つの分科会をシンポジウム形式で行った。

第一分科会では、「商工会議所活動に果たす青年部の役割」（統一テーマ）をテーマに、足立義一境港商工会議所専務理事、安部一成山口大学経済学部教授が基調講演。さらに、鳥取、松江、山口の三青年部から意見発表があり、これらを基にディスカッションを行った。

第二分科会は、「夢から実践へ！わがまちの二十一世紀は我々の手で!!」をテーマに、藤原洋(㈱鉄の歴史村地域振興事業団専務理事、杉矢邦太郎島根大学法文学部教授の基調講演のあと、米子、津山、益田の三青年部より、日頃の実践活動を中心に意見発表が行われ、討議へ移った。

いずれの分科会ともさまざまな意見が出て、討議され、参加者には、何かを持ち返っていただけたと思う。しかし、実際には時間に追われての分科会で、十分に討議できなかったところがあったように思われる。

分科会終了後に全体会議が行われ、知事をはじめ市長、県商工会議所連合会会頭より祝辞を賜り、次年度運営研究会開催地・津山の発表、本年度全国大会（高知）のPR等が行われた。引き続き、会場を移して懇親会が行われ、益田青年部会員による石見大鼓・神楽の上演、益田競馬のPR等が行われた。

最後に、小林幹生商青連副会長の音頭により、恒例の一本締めが行われ、「中国ブロックは一つ」の意を新たにした。

▲みんな輪になって（懇親会風景）

九州ブロック　別府商工会議所青年部

八百二十三人という過去最多の参加者をもって、第九回九州ブロック運営研究会が、別府商工会議所青年部の主管により八月二十七日に開催された。

会場となった杉の井ホテルは、別府市街地はもちろん遠く四国も一望できる高台にあり、我々青年部が新しい時代へ向けて研修する場としては、まさにうってつけのところであった。

式典は青年部の「綱領」「指針」の朗読、九州ブロック出身の石川会長のあいさつにつづき、主管青年部である別府の後藤会長、友永会頭の歓迎のあいさつなど順次進められ、最後にコンピュータグラフィックによる参加青年部の紹介が行われた。

分科会は、第一分科会で統一テーマ「商工会議所活動に果たす青年部の役割」について、参加OBの菅(竹田)、安部(豊後高田)、砂川(沖縄宮古)の三氏をコーディネーターとし、貴重な意見・アドバイスをいただいた。

第二・第三分科会では本年度商青連のスローガンにある「友情の輪」というテーマで、ハード・ソフト両面から部員同士の関わり、コミュニケーションの取り方について、パネルディスカッションを行った。

また、会長会議では、来年度開催地に沖縄宮古が決定し、全体会議で報告された。

記念講演には、西日本後楽園の岩堀社長により「リゾート開発」について、後楽園のコンセプトも交えながら講話をいただいた。

そして、大会の最後を飾る懇親会は、懐かしの六十年代ポップスでスタート。各県対抗芸能大会、海外旅行が当たる抽選会等々、仲間との再会と新しい出会いを喜び合いながらの楽しいひとときを過ごした。

「若手経営者」と聞くと、「二代目」という言葉に結びつく。すべてがゼロから出発した戦後の復興期の中で、この日本の経済を驚くべき勢いで成長させてきたのは、強烈な個性を持った「先代」と呼ばれる創業者群であったと言っても過言ではない。それだけに、その後を継いだ二代目は、寄せられる周囲の期待をプレッシャーとして、常に意識しなければならない立場にある。このような中で、先代より引き継いだ企業を同じ水準に保ち、また伸ばしていくためには、経営者として強くアピールできる個性と確固たる経営ポリシーが必要であることは言うまでもない。会社と自分の将来の姿を明確にし、その目標に向かって努力していく中で自信と信念が生まれ、先代を越えていく力となるのではないだろうか。

最近のわが国経済を見ると、個人消費の堅調な伸びや民間設備投資の増勢など、内需主導による景気回復が進んでいるが、一方では円高の定着、貿易摩擦などにより、消費者ニーズの多様化や流通機構の変化、技術革新などへの対応が迫られ、厳しい環境のもとに産業構造も急速な変化を遂げようとしている。

しかし、この急激な変化と問題点は、中小企業にとられた、またとない試練として受け止めていくべきではないだろうか。問題のないところに進歩はないわけで、それを解決するために研究し努力していくところにこそ、企業の発展があり、経済の成長がある。

このような状況の中で、業界の先導的役割を担っている商工会議所の使命がますます大きくなっていくのは必至であり、商工会議所の活性化を図り、また若手経営者の育成の場として設置された青年部への期待も大きくなってきているのである。各地の青年部が設立された目的は多々あると思われるが、やはりその中に共通して求められているのは、新しい観点からの発想と行動力、そして若さと情熱であろう。そういう意味で、商青連の創立五周年記念誌「明日への挑戦」の中にあるアンケート調査結果を踏まえての提言を見ると、「青年部が商工会議所活動の一翼を担い、会議所活動の活性化を図るのであれば、明確な目標、目的を持ち、独想的発想のもとに勇気と情熱をもって積極果敢に行動することこそ、求められる青年部の姿であろうと考えられる」とあり、誠に力強いものを感じる。

経営資源の乏しい中小企業の間では、それを補うものとして異業種交流の波が急速に広がっている。発想の転換を生み、新たな事業展開をするうえでの情報収集の場として、若手経営者の名のもとに集まった青年部は、まさに異業種交流にもってこいの場であり、それを活用しない手はない。もっとディスカッションをし、互いを高めていくことが、ひいては青年部会員意識の高揚と活動の活発化につながるものと思う。

本年、市制施行百周年を迎えた松江市も、記念事業である「'89松江菓子博」を成功裡に終え、やればできるんだという自信を持ったわけであるが、二十一世紀へ向けての新たな第一歩を踏み出すに当たって、そのリーダーとなるべき若手経営者には多大な期待を寄せている。その使命を十分認識され、期待を裏切ることなく、地域社会の発展に力を尽くしていただきたい。辞書によると「青年」とは「青は五行節で春の色を表わす。人生の春に当たる年」とある。木々が芽吹き、一気に成長しようとするエネルギッシュな春のように、二十一世紀に向けて大きく成長してほしいと望むものである。

若い情熱かたむける
委員会活動状況

商青連は本年度、「拡げよう友情の輪　創ろう新時代の日本」をスローガンに掲げ、①組織の拡充・強化、②研修・研究活動の充実、③広報活動の推進、④主要会議・交流会の開催、⑤政策提言活動の推進、⑥「青年部への提言」等のフォローアップの推進、を事業計画に盛り込んで各種の事業に取り組んでいる。そこで、総務をはじめ組織強化、研修、広報、特別の五委員会の委員長に、その活動状況について報告していただいた。

■総務委員会

委員長
鈴木　隆則

商青連の創立五周年記念誌「明日への挑戦」を受けて、商青連のよりよき体制・運営のあり方を、より具体化、実効あるものとすべく、本年一年間、七人のメンバーで喧喧ごうごうやっている。本年度の総務委員会担当の事業は、①各地青年部運営活動状況調査、②各地県連の運営状況調査、③各地青年部のOB会調査、④商青連会長選出方法の検討、⑤商青連役員研修会の開催、⑥十一月と二月の会員総会の準備、⑦日商幹部と商青連役員との懇談会の開催、などである。

このうち、各地県連の運営状況調査は、現状把握と県連の商青連での位置付けを探るために行ったもので、このデータを公表し、各地青年部活動の一助とし、また、より望ましい商青連の組織体制創りを目指したいと考えている。また、現在まで、商青連会長は全国大会開催県から選出されているが、その是非と全国大会開催地決定方法とを交えて検討している。

さらに、商青連役員を対象とした、全国区の役員として、またブロックの代表としての自覚と責務、役割をより一層認識してもらうために開催が必要との結論に達し、その準備を進めているところである。

以上、本年度総務委員会は、創成期から成長期へと、過渡期にある商青連の現状を見つめ、よりよき商青連創りのため、努力しているところである。会員諸兄のより一層のご指導・ご意見をお待ちしております。

■組織強化委員会

委員長
町田　雅之

組織強化委員会の活動は、本年度スローガンの中の「拡げよう友情の輪」に象徴される。全国組織として、それにふさわしい数の裏付けが必要とされている。具体的には、青年部の設置率を全国の商工会議所の六五％（年度当初約六三％）、そのうち商青連への加入率を八〇％（同七二％）以上とすることが、特に本年度の活動目標として、役員会で設定されている。

青年部を設置するか否か、商青連に加入するか否かは、程度の差こそあれ、それぞれに理由のあることなので、私達の力の及ばない部分も多々ある。しかしながら、前年度からのアンケート結果等も出ており、ある程度組かく対応していくことで、次年度の見込みを含めると、目標は達成できそうである。

一方では、そういった数だけのことではなく、青年部活動の内容を意義あるものにするために、ブロック別運営研究会、ブロック内会長会議の実施要項の充実を図った。これは、各ブロックの状況をできるだけ考慮して手を加えたものであるので、特に会長会議を有意義に展開して、全国的な青年部の盛り上がりを実現していってほしい。

なお、商青連では都道府県ごとの青年部連合会設立のための会議に助成金を出している。また本年度は、青年部設置、商青連加入を促進するための懇談会を各地で開催すべく予算を設けている。こういったものを前向きに利用し、「友情の輪」を拡げることに協力をお願いしたい。

■特別委員会

委員長
水尾　一二

本年度の特別委員会は、六十三年度に策定した商工会議所青年部の「綱領」「指針」を定着させることを、主な目的にしている。商青連も既に、設立してから七年目に入り、各地青年部のメンバーの多くが、青年経済人として大活躍している。ところが、青年部の活動目的、方向、発足までの経緯については、いずれも異なる点が数多くみられる。これから青年部が発展し、根を各地でしっかり張っていくためには、ここで本質を見直し、性格の異なる各地の青年部が、できる限り統一歩調を取っていきたいと思っている。青年部の呼称、役職名の統一もその一環と考えている。

特に、特別委員会から強くお願いしたいのは、「綱領」「指針」を、さまざまな機会に声を出して読んでいただくことである。これは、これからの青年部の伝統をつくりあげるために、是非とも必要なことである。

十一月十六日に高知で開催する第十一回会員総会の時に、掲示用に拡大した「綱領」「指針」を各単会に配布すべく準備をすすめているところである。また、もう一つ委員会として取り組んでいることに、「全国大会開催要綱」の作成がある。全国大会も本年度で九回目を迎え、登録料の値上げ等の問題が出てきている。

ここで、もう一度、全国大会の本質を考え、どうあるべきか真剣に検討し、平成二年度以降の参考になるものを作成したいと努めている。

■研修委員会

委員長
山本　晃正

平成元年度は、石川正一商青連会長のもと、「拡げよう友情の輪　創ろう新時代の日本」をスローガンに、全国各地の商工会議所青年部では、活発な事業活動が行われていることと思う。

私ども商青連の研修委員会では、十月五～六日に視察研修を行った。ニュートレンドを創造し、素晴らしい街づくりをされている横浜を中心に、今、全国の注目を浴びている、話題の「マイカル本牧」と、横浜商工会議所の協力を得て、みなと横浜の開発の様子を行政当局からも聞いた。また、翌日は最先端の社員教育の会報コンクールを多数の応募のもと実施された。本年度もまた機関紙「翔生」を発行し、各地青年部の情報交換を促すとともに青年部活動を積極的にPRするために、①機関紙「翔生」（第七・八号）の発行及び配布、②日本商工会議所発行の「会議所ニュース」「石垣」を活用しての青年部活動状況の紹介、③青年部運営活動状況調査の実施、を事業計画に掲げて活動しています。

特に、本年度は石川六郎日商会頭との懇談会を開催し、国際化、複雑・多様化する経済環境のもと、世界の中での日本としての自覚、国境のない経済を広い視野のもとで考えていく必要性を改めて認識しました。

また、地域総合経済団体である商工会議所が果たす役割、また、その中でも商工会議所活動の一翼を担う青年部に期待するところが大であるというご意見をいただきました。こうした点からも、商青連として未設置商工会議所に対して青年部の設置促進に努めていきます。

■広報委員会

委員長
小林　幹生

昭和六十三年度は商青連の創立五周年を記念して、商工会議所青年部連創りのため、努力しているところである。会員諸兄のより一層のご指導・ご意見をお待ちしております。

編集後記

宇野政権より海部政権への追風マドンナ旋風、消費税、国際化と我々を取り巻く環境は目まぐるしく変化しています。そして今、地方の時代といわれて久しくなりますが、政治、経済、人口と、ますます首都圏一極集中が進んでいきつつある中で、まさに我々商青連が各地方の地域活性化を真剣に考えていかねばならない必要性を感じます。

松下幸之助の言葉に「世の中に必要なものは栄え、不要なものは滅びる」という言葉があります。そのためにも、時代の流れを正しく認識して、中央から地方へ、地方から中央へと、「声」と「情報」を広聴・広報していくのが、この機関紙「翔生」の果たす役目だとひしひしと責任を感じております。

全国九ヵ所で開催されたブロック別運営研究会も、古くて新しい「商工会議所活動に果たす青年部の役割」を分科会のテーマにして本音で討議され、互いに研鑽を積んできております。そして今、高知での第九回全国大会に向けて大成功を祈念し、それが各地の商工会議所活動の活性化、地域経済の発展につながることを期待します。（小林幹生）

平成元年度の委員会構成

◎＝委員長
○＝副委員長
（敬称略）

〈総務委員会〉
◎鈴木　隆則（長　井）
○中島　英一（村　上）
宮田　克己（市　川）
田中　伸治（彦　根）
津本　憲一（津　山）
堺　克由（徳　島）
福井　正（鹿　島）

〈組織強化委員会〉
◎町田　雅之（平　戸）
○奥田　利明（浦　河）
柳谷　萬（青　森）
能澤　孝博（桐　生）
広森　重孝（鈴　鹿）
南谷　郁夫（武　生）
縫谷　昌生（鳥　取）
宮本萬太郎（八幡浜）

〈研修委員会〉
◎山本　晃正（浜　松）
○後藤　忠毅（洲　本）
小松　正実（下諏訪）
石原　新一（鎌　倉）
原田　義之（高　砂）
永通　烈志（松　江）
首藤　始（別　府）
津布久正明（小　山）

〈広報委員会〉
◎小林　幹生（岩　国）
○和田　均（高　知）
前田豊太郎（美　幌）
宮城　達男（仙　台）
友田　幸雄（魚　津）
渡辺　隆一（本　庄）
三輪　征司（日　向）
池増　徹（指　宿）

〈特別委員会〉
◎水尾　一二（坂　出）
○深川　寛治（関　）
石森　成彦（福　島）
平松　克章（水　戸）
前田　龍生（春日井）
小西　真明（北大阪）
伊藤　健（大　館）

商工会議所青年部の設置状況

※494商工会議所のうち、320商工会議所に設置（設置率：64.8％）　（平成元年10月6日現在）

ブロック名（設置数・率）	都道府県名（会議所数）	商青連会員青年部（242）
北海道（14/40）（35.0％）	北海道（40）	帯広、岩見沢、根室、栗山、美唄、遠軽、美幌、赤平、浦河、上砂川、登別（11）
東北（37/43）（86.0％）	青森（6） 岩手（10） 宮城（6） 秋田（5） 山形（6） 福島（10）	青森、八戸（2） 一関、花巻、北上、江刺、久慈（5） 仙台、塩釜、石巻、気仙沼、古川、白石（6） 秋田、大館（2） 山形、酒田、鶴岡、米沢、新庄、長井（6） 福島、郡山、会津若松、いわき、白河、原町、会津喜多方、相馬、須賀川、二本松（10）
北信越（31/50）（62.0％）	新潟（16） 富山（8） 石川（6） 長野（20）	新発田、燕、村上、五泉、亀田（5） 富山、高岡、氷見、新湊、魚津、砺波、滑川、黒部（8） 七尾、輪島（2） 下諏訪、塩尻、中野、松代（4）
関東（66/94）（70.2％）	茨城（9） 栃木（9） 群馬（10） 埼玉（6） 千葉（15） 東京（7） 神奈川（12） 山梨（2） 静岡（15）	水戸、土浦、古河、日立、石岡、下館、那珂湊、結城、勝田（9） 足利、小山、真岡（3） 前橋、桐生、館林、伊勢崎、高岡、藤岡（6） 川口、熊谷、大宮、本庄、与野、蕨、上尾（7） 銚子、木更津、市川、茂原、野田、館山、八街（5） 東金、柏（2） 横須賀、小田原、平塚、厚木、秦野、鎌倉、三浦、相模原（8） 甲府、富士吉田（2） 静岡、浜松、沼津、清水、掛川、藤枝（6）
東海（22/44）（50.0％）	岐阜（12） 愛知（19） 三重（13）	関、恵那（2） 瀬戸、蒲郡、春日井（3） 津、伊勢、鈴鹿、尾鷲、名張、熊野（6）
近畿（43/67）（64.2％）	福井（7） 滋賀（7） 京都（8） 大阪（18） 兵庫（17） 奈良（3） 和歌山（7）	福井、敦賀、武生、大野、勝山、鯖江（6） 彦根、草津、守山（3） 舞鶴、福知山、綾部、宇治、宮津、亀岡、城陽（7） 泉大津、岸和田、八尾、北大阪、守口門真、高石、箕面（7） 洲本、高砂、龍野、小野（4） 奈良、生駒（2） 海南、田辺、新宮、橋本、紀洲有田（5）
中国（33/51）（64.7％）	鳥取（4） 島根（8） 岡山（13） 広島（12） 山口（14）	鳥取、米子（2） 松江、浜田、出雲、平田、益田、大田、安来、江津（8） 津山（1） 府中、大竹、東広島（3） 下関、宇部、山口、徳山、下松、萩、岩国、山陽、長門、光、小野田、小郡、柳井（13）
四国（26/29）（89.7％）	徳島（6） 香川（6） 愛媛（11） 高知（6）	徳島、鳴門、小松島、鳴島、阿波池田、阿南（6） 高松、丸亀、坂出、観音寺、多度津、善通寺（6） 宇和島、今治、八幡浜、新居浜、西条、伊予、大洲、東予市（8） 高知、中村、安芸、須崎、宿毛、土佐清水（6）
九州（48/76）（63.2％）	福岡（19） 佐賀（8） 長崎（8） 熊本（9） 大分（10） 宮崎（9） 鹿児島（10） 沖縄（3）	八女、豊前、行橋、筑後、宮田、甘木（6） 伊万里、小城、鹿島（3） 長崎、島原、諫早、大村、福江、平戸（6） 山鹿（1） 別府、大分、中津、日田、佐伯、臼杵、津久見、佐賀関、豊後高田、竹田（10） 日向、高鍋（2） 指宿、串木野（2） 那覇、沖縄、沖縄市古宜（3）
特別会員	北海道連絡協議会、青森県連、宮城県連、山形県連、福島県連、富山県連、茨城県連、群馬県連絡協議会、神奈川県連絡協議会、静岡県連、福井県連、島根県連、山口県連、徳島県連、香川県連、愛媛県連、高知県連、福岡県連、大分県連、沖縄県連（20）	